

10

稲沢

稲沢市立法立小学校

ヤマウチ スミカ
氏名 山内 純華

分科会番号

8

分科会名

音楽教育

1 研究題目

自己の成長を実感し、音や音楽と豊かに関わる児童の育成
ー音楽的な見方・考え方を働かせ、仲間と共に学び合うことができる指導の工夫を通してー

2 研究要項

(1) 研究の主題設定の理由と研究のねらい

令和5年度は、ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、一人一人に達成感を味わわせる手だての工夫を通して、「できる」「分かる」を感じ、主体的に音楽を楽しむ児童の育成を目指し、研究を行った。成果として、これまで以上に一人一人が個に応じた身に付ける力を自覚し、意欲的に表現しようとする事ができた。しかし、児童が音楽を形づくっている要素など音楽を知覚するための知識や、表現技能が十分でないことから、技能向上を目指したさらなる手だての必要性が課題となった。

そこで今年度は、音楽的な見方・考え方を働かせ、仲間と共に学び合い、高め合うことができるようなきめ細やかな指導方法を工夫することで、一人一人が自己の成長を実感し、音や音楽と豊かに関わる児童の育成を目指していきたい。

(2) 研究の仮説

音楽的な見方・考え方を働かせ、仲間と学び合い、高め合うことができるような指導方法を工夫することで、一人一人が自己の成長を実感し、音や音楽と豊かに関わる児童が育つだろう。

(3) 研究の構想

① 事前アンケートの結果より

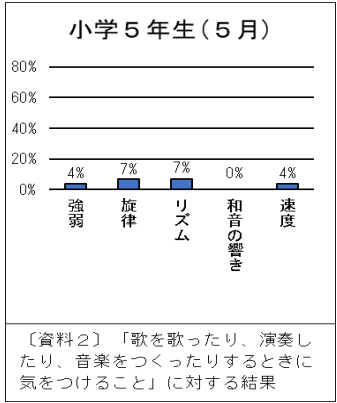
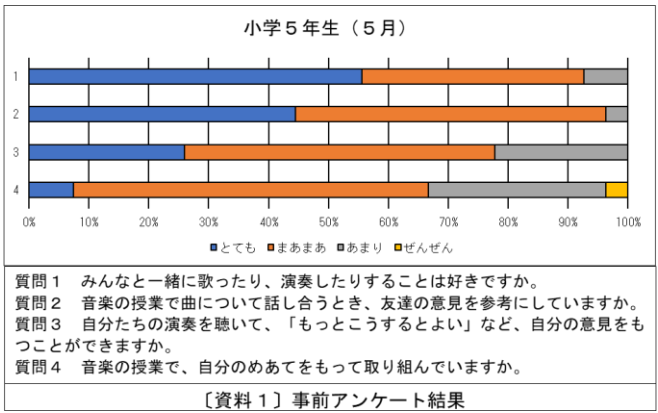
「一緒に歌ったり、演奏したりすることが好きか」と「話し合うとき、友達の意見を参考にしているか」という質問に90パーセント以上の児童が「とても」や「まあまあ」と答えているのに対し、「自分の意見をもつことができるか」という質問に「とても」や「まあまあ」と答える児童が80%を下回る結果となった。さらに、「自分のめあてをもって取り組んでいるか」という質問に対しても、80%を下回った〔資料1〕。また、「歌を歌ったり、演奏したり、音楽をつくったりするときに気をつけること」について尋ねると、音楽を形づくっている要素を意識している児童の割合がどの項目も少ないことが分かる〔資料2〕。

以上のことより、演奏することは好きで、友達の意見を受け入れる気持ちがあっても、「音楽を形づくっている要素」について十分に理解していないため、音楽的な見方・考え方を働かせながら学習に対する目標をもったり、自分の思いをもって友達と話し合ったりすることを苦手としていると考えられる。そこで、音楽的な見方・考え方を意識し、仲間と共に高め合いながら音や音楽と豊かに関わる児童を育てていきたいと考えた。

② 目指す児童像

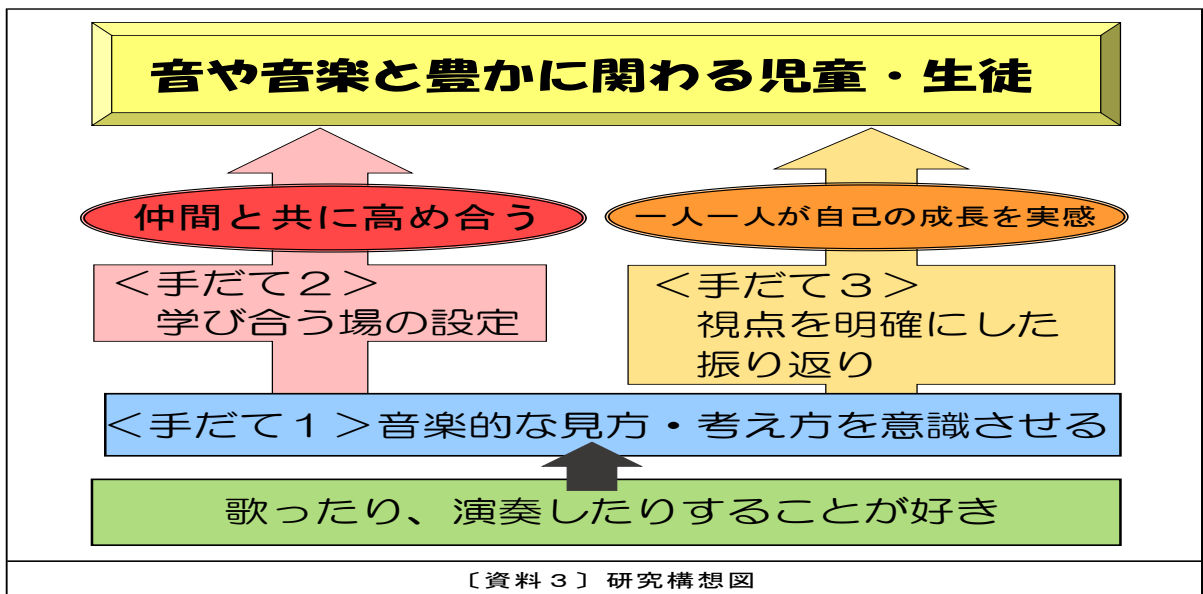
音楽的な見方・考え方を意識し、仲間と共に高め合いながら音や音楽と豊かに関わる児童

③ 目指す児童像にせまる手だて



- <手だて1> 音楽的な見方・考え方を意識させる
 - 精選された発問の工夫
 - 音楽を形づくっている要素やその働きを理解させる工夫
 - 知覚したことと感受したことを結び付ける工夫
- <手だて2> 学び合う場の設定
 - ICTの活用
 - 視点を明確にし、表現を高めるための話し合い
- <手だて3> 視点を明確にした振り返り
 - 1時間又は題材を通した目標を明確にする工夫
 - 自己の成長を実感できる振り返りの方法の工夫

④ 研究構想図



3 研究の実際

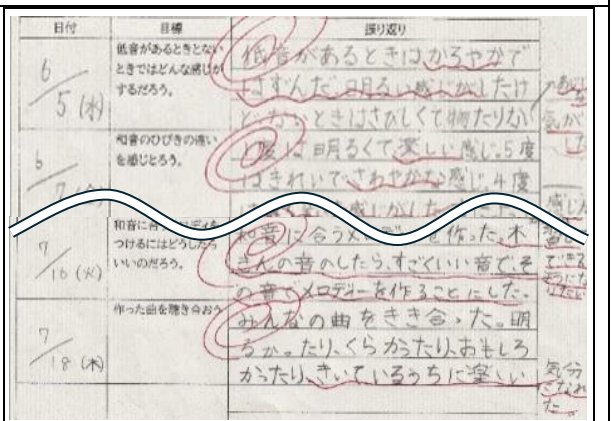
(1) 実践例 (小学校5年生)

- ① 題材 5年生のテーマソングを作ろう (6時間完了)
- ② 指導計画

時	主な学習活動	【具体的な手だて】<番号>
毎時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りシートの記入 ・ 授業の挨拶を、和音に合わせて行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 毎時間のめあてや課題を事前に振り返りシートに書いておくことで、学習の見通しをもつとともに、毎時間の振り返りの視点が明確になるようにする。 <手だて3> ○ 毎時間の授業の挨拶の際に、1度→5度→1度の和音に合わせて動きをつけることで、それぞれの和音の響きの違いを感じとれるようにする。 <手だて1>
1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 低音があるときとないときでは、どんな感じがするだろう。 「茶色の小びん」 ・ 旋律を歌ったり演奏したりする。 ・ リコーダーと低音を合わせて演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 低音があるときとないときの違いについて聴き比べることで、音の重なり方の違いについて知ることができるようにする。 <手だて1>
2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和音の響きの違いを感じ取ろう。 「茶色の小びん」 ・ 和音の響きの違いを感じ取る。 ・ 「茶色の小びん」の和音について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ それぞれの和音を聴き、感じた違いを言葉で表したり、体全体で表現したりする活動を通して、和音の響きの違いについて考える。 <手だて1>

3	<p>○ 和音と低音があるときとないときでは、どんな感じがするだろう。 「こきょうの人々」</p> <ul style="list-style-type: none"> メロディのみ、低音とメロディ、低音と和音とメロディの各組み合わせで演奏する。 演奏したものを録音し、聴き比べる。 	<p>○ 色で和音の種類を分け、教科書やキーボードに同じ色で印をつけることで、和音の演奏を簡単にできるようにする。 <手だて1></p> <p>○ メロディのみ、低音とメロディ、低音と和音とメロディの各組み合わせで演奏し、聴き比べることで、響きの違いを感じられるようにする。 <手だて1></p> <p>○ 演奏した音をボイスレコーダーで録音することで、自分たちの演奏を客観的に聴くことができるようにする。 <手だて2></p>
4	<p>○ 自由に曲を作ってみよう。 「和音に合わせてせんりつをつくらう」</p> <ul style="list-style-type: none"> カトカトーンに「こきょうの人々」で使われた和音を打ち込み、自由にメロディをつける。 	<p>○ カトカトーンを使うことで、好きな音色を使いながら、音楽が苦手だと感じている児童も抵抗なく曲作りに親しむことができるようにする。 <手だて2></p>
5	<p>○ 和音に合うメロディを付けるにはどうしたらいいのだろう。 「和音に合わせてせんりつをつくらう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 和音に合うメロディをつけるために大切なことを考える。 	<p>○ 和音とメロディの音が全く一致していない曲を提示することで、和音とメロディが合う、合わない感覚を感じることができるようにする。また、和音から旋律の音を拾うことで、和音に合った音楽を作ることができることに気付かせる。 <手だて1></p>
6	<p>○ 作った曲を聴き合おう。 「和音に合わせてせんりつをつくらう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 曲を聴き合い、良いと思った曲に付箋を使って投票する。 	<p>○ できた音楽を聴き合って比べることで、自分の作る音楽をよりよいものにする。 <手だて2></p> <p>○ 付箋を使って投票することで、一目で得票数が分かるようにする。また、得票数を基に制作した曲について振り返り、自己の成長へとつなげる。 <手だて3></p>

③ 指導の実際

時	児童の様子	
毎時	<p>導入で、学習計画を児童と設定し、振り返りシートに授業のめあてや課題をあらかじめ記載することで、学習の見通しがもてるようにした。また、振り返る内容が明確になるようにした〔資料4〕。授業の計画を振り返りシートに記載しておくことで、「次はいよいよ曲作りか」などとつぶやく児童がおり、次に学習する事柄を理解しながら取り組むことができた。</p> <p>毎時間の授業の挨拶では、1度→5度→1度の和音に合わせて動きをつけることで、<u>響きの違いを感じとることができるようにした</u>。何度も繰り返していくうちに、授業の終わりの挨拶で、1度→4度→1度の和音を弾くと、2、3人の児童がいつもと違う音を弾いたことに気付いた。それぞれの和音の音の違いに気付く児童は少なかったが、何人かは違いに気付くことができていた。</p>	 <p>〔資料4〕 振り返りシートの工夫</p>
1	<p>低音があるときとないときではどんな感じがするだろう。</p> <p>まず、「茶色的小びん」で扱われている、低音を表すへ音記号と、繰り返し記号について確認した。へ音記号の仕組みについて確認し、教科書に階名を記入した。次に、低音の伴奏に合わせて歌い、曲に慣れ親しんだ。その後、レコーダーで主旋律を演奏したり、キーボードで低音をつけて合奏したりした。<u>低音があるときと無いときを聴き比べることで、音の重なり方の違いについて気付くことができるようにした。</u></p> <p>また、自分たちの演奏をボイスレコーダーで録音することで、客観的に響きの違いを聴くことができるようにした。振り返りでは、「低音がある方では迫力や一体感がある」という意見があり、無いと物足りないと感じている児童が8割だった。低音の重要性について気付くことができた。</p>	

2	<p>和音の響きの違いを感じ取ろう。</p> <p>まず、ハ長調に使われている和音について確認した。次に1度、4度、5度の和音の響きの違いについて確認し、それぞれの音を聴き比べ、和音を聴いてポーズを取った。<u>体を使って和音を表現することで、響きの違いについて理解することができた。</u>また、和音を聴き、どのような響きの違いを感じるか、ワークシートに記入した。1度では「静かな感じ、落ち着く感じ、明るく元気な感じ」、4度では「落ち着く感じ、明るい感じ」、5度では「生き生きとして明るい、楽しい感じ、上がっていく感じ」という意見が見られた。和音によって落ち着くと感じる児童もいれば、元気だと感じる児童もおり、感じ方はそれぞれであった。</p> <p>振り返りには、どの和音も音が違うと答えている子や、似ていると感じる子もおり、和音の響きの違いに気付いている子もいれば、はっきりと感じ取れていない子もいるようだった。</p>
3	<p>和音と低音があるときとないときでは、どんな感じがするだろう。</p> <p>まず、「こきょうの人々」に使われている和音の種類を色に分けた。<u>1度は赤色、4度は緑色、5度は青色にし、色鉛筆を使って教科書に色分けをした</u>〔資料5〕。</p> <p>また、キーボードにも同じ色を用いたシールを貼り、和音を演奏しやすいようにした〔資料6〕。演奏の際には、両手を使ってもよいこととし、演奏する際の手の形ではなく、和音の響きの違いを感じ取りやすいようにした。その結果、鍵盤の位置を把握するのが苦手な児童も弾き方が分かり、困ることなく演奏することができていた。</p> <p>次に、<u>メロディのみ、低音とメロディ、低音と和音とメロディを演奏したものを聴き比べ、響きの違いを感じられるようにした。</u>その際に演奏をボイスレコーダーで録音することで、自分たちの演奏を客観的に聴くことができるようにした。</p> <p>振り返りでは、「和音と低音がある方が華やかで、響く感じがする」という意見がたくさん出た。メロディや低音のみよりも、和音と低音の両方がある方が、豊かな演奏に聴こえると感じる事ができた。</p> <div data-bbox="1054 651 1422 831" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1114 846 1385 880">〔資料5〕和音の色分け</p> <div data-bbox="1054 902 1422 1099" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1082 1111 1385 1144">〔資料6〕シールで色分け</p>
4	<p>自由に曲を作ってみよう。</p> <p>教育芸術社より、webアプリケーションとして出されている作曲アプリ「カトカトーン」を使用し、作曲を行った。カトカトーンを使用することで、作曲の際に音符を書いたり、作った曲を演奏したりする必要が無くなるため、音楽が苦手な児童も抵抗なく作曲ができた〔資料7〕。また、様々な楽器が用意されており、使いたい音色を自由に選択しながら曲作りをすることができた。作曲の際にはイヤホンを使い、自分の作っている曲の音のみが聴こえるようにすることで、曲作りに集中できるようにした。まず、音色やリズム、音のスケッチで扱う和音（1度→4度→5度→1度）と、メロディを打ち込み、簡単な操作方法を習得した。打ち込んだ後は、自由に触る時間をたっぷり設け、操作に慣れたり、様々な機能を学んだりすることができるようにした。音色を変えて演奏する様子や、自由に音を打ち込むことでリズムの面白さを実感する様子が見られた。</p> <p>作りながら、「おもしろいリズムができたよ」「この曲聴いてみて」と、近くの席の児童と交流しながら学び合う姿が見られた〔資料8〕。</p> <p>振り返りから、カトカトーンを使用することで、よりよい音楽を作るために、繰り返し聴きながら改善する様子が窺われた。リズムや音の並べ方などが分からない児童も、感覚的に作曲をすることができ、楽しみながら曲作りを進めていた。</p> <div data-bbox="1007 1368 1422 1659" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1034 1675 1394 1709">〔資料7〕カトカトーンの画面</p> <div data-bbox="1102 1720 1414 1951" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1134 1962 1414 1995">〔資料8〕制作する様子</p>

5

和音に合うメロディをつけるにはどうしたらいいのだろう。

操作に慣れてきたところで、作曲りに取り組み始めた。作曲りのルールを次のように設定した。

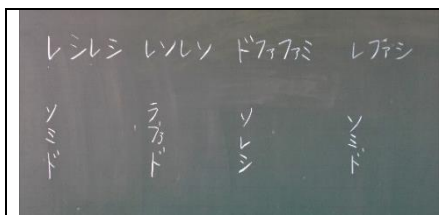
- ・和音は茶色の小びんと一緒のものを使う
- ・4分の4拍子
- ・始めの音は和音の音から

それ以外については自由に取り組みさせた。また、和音は1度→4度→5度→1度の繰り返しにし、8小節の短いメロディにすることで、簡単に曲が作れるようにした。

曲を作っていると、児童から、「なんだか怖い感じに聴こえ

る」「自由に打ち込んでみたけれど、和音と合わない」という声が聞こえてきた。そこで、和音に使われていない音をメロディに使用した曲を教師が準備し、児童に聴かせた。「不思議な感じがする」「気持ち悪い」という意見があった。演奏した和音とメロディを階名で黒板に書き、なぜ違和感を感じるかについて考えた〔資料9〕。児童からは、「和音の中にメロディの音が入っていないから」という意見が挙がった。挙がった意見を基に、和音の中のメロディを強拍となる3拍目にも使うことと、和音以外の音を少なめにすることをアドバイスし、もう一度作曲りに取り組んだ。制作をはじめると、「確かに、和音の音を使った方が、いい気がする」というつぶやきがあり、和音の響きと旋律との関わりについて、体感することができた。

振り返りでは、「和音の音と同じ音を使えば、和音に合うメロディを作ることができる」という記述や、「和音がドミソのときは、ドミソの音を多めにするといい」という記述が見られ、メロディの中に和音の音をたくさん使うとよりよい響きになるということに気付くことができた。



〔資料9〕和音と違う音を使ったメロディの曲

6

作った曲を聴き合おう。

10分間自由に教室を移動し、全員の曲を聴くように指示をだした。その際に、一人につき2枚の付箋を渡し、いいと思った人の机に付箋を貼り、票数が一目で分かりやすいようにした〔資料10〕。その後、票が多く集まった曲を全員の前で発表した。

児童が作った曲のなかでも、より多く得票されていた6つの曲のうち5つは、和音から音を拾って作られていた。その他にも複数の楽器で和音を鳴らしている児童や、打楽器を使ってリズムを打ち込んでいる児童が多く選ばれていた。発表した曲を聴き、「みんなすごいなあ」「この人の曲はいろいろな楽器があるし、高い音が多くてにぎやかな感じがするね」「それぞれに工夫がしてあって、よかったな」「和音の音を使って作られているとまとまりがあるね」という感想がでた。一人一人の曲の工夫に気付くとともに、お互いの曲のよさに気付くことができていた。



〔資料10〕付箋を使って投票する様子

④ 結果と考察

<手だて1について>

- 毎時間の授業の挨拶で1度→5度→1度の和音に合わせて動きをつけることで、響きの違いを感じることができた。また、4度のポーズを決め、1度→4度→5度→1度の順に体を使って和音を表現することで、楽しみながら響きの違いについて理解することができた。
- 1度の和音を赤、4度の和音を緑、5度の和音を青に色分けし、教科書やキーボードにも同じ色で印をつけることで、困ることなく演奏することができた。
- 「茶色の小びん」と「こきょうの人々」では、低音と和音がそれぞれある場合と無い場合の演奏を聴き比べることで、響きの違いを実感することができ、和音や低音がある場合の方が、豊かな音に聴こえると気付くことができた。
- 曲を制作する際に、和音とメロディの音が全く重ならない音楽を提示することで、メロディには和音から拾った音を使う方が、よりよい曲を作ることができると気付くことができた。

<手だて2について>

- 演奏した曲をボイスレコーダーで録音することで、自分たちの演奏を客観的に聴くことができた。
- カトカトーンを使用することで、演奏能力を問わず、好きな音色を自由に選択することができた。また、拍などの基本的な音楽のしくみや、読譜が苦手な児童も抵抗なく音を打ち込むことができ、どの児童も楽

しみながら作曲をすることができた。しかし、作られた曲を聴くと、ルールに従わず適当に音を打ち込んでいる児童も多くいたので、児童がお互いにアドバイスしたり、作品の共有方法を工夫したりするなど、よりよい曲を作るために学び合う場をさらに設定する必要性を感じた。

- 投票によって選ばれた曲を全員の前で発表することで、お互いの曲のよさに気付き、よりよい曲を作るためにもっとこうしたいという気持ちをもつことができた。しかし、改善する時間を設けることができなかったため、中間発表を設けるなど、お互いの曲を交流し合う機会をつくる必要性を感じた。

<手だて3について>

- 毎時間のめあてや学習課題が書かれた振り返りシートを用意することで、見通しをもって児童が活動できた。また、振り返る内容が明確であったため、書く内容について困ることなく記入することができていた。
- 付箋を使って投票することで、得票数が一目で分かるようにした。また、得票数を基に、自分の制作した曲について振り返ることができ、自己の成長につながった。

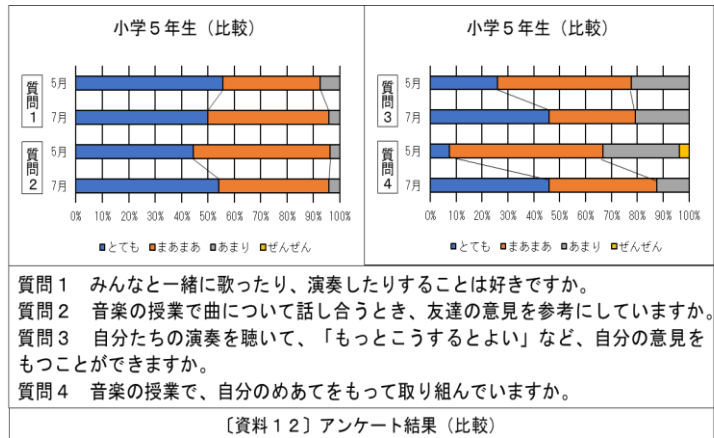
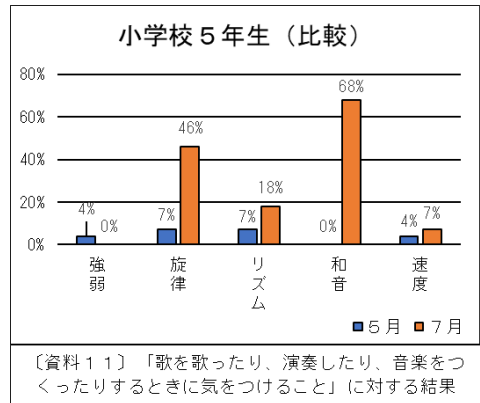
4 成果と課題

(1) 実践前後のアンケートの比較より

実践後に行ったアンケートより、手だて1について、「歌を歌ったり、演奏したり、音楽をつくったりするときに気をつけること」として「旋律」と「和音の響き」と答えた児童の割合がかなり増加した〔資料1 1〕。これは、本研究を通して学ばせたい「音楽を形づくっている要素」を、題材を通して意識させながら授業を展開することができたためと考えられる。

手だて2について、「自分の意見をもつことができるか」という質問に「とても」や「まあまあ」と答えた児童が80%を下回ったものの、事前アンケートの時より割合が増加した〔資料1 2〕。これは、ICT機器を用いて演奏を聴くことで、客観的に自分達の演奏を聴くことができ、意見をもちやすくなったためと考えられる。しかし、音楽づくりの場面では、中間発表など自分の意見を相手に伝える時間を取れなかったため、「自分の意見をもつことができた」と児童自身が十分に実感することができず、若干の増加にとどまったのではないかと考える。

手だて3について、「自分のめあてをもって取り組んでいるか」という質問に、「とても」や「まあまあ」と答えた児童の割合が増加した。これは、題材全体を見通すことができる振り返りシートを用いることで、以前より自分の目標をもちながら学習に取り組むことができたためと考えられる。



(2) 成果

- ・ 手だて1では、「和音」について身体表現や色分けを通して理解することができた。また、聴き比べなどを通して「音楽を形づくっている要素」がもたらす効果に気付かせることで、児童に音楽的な見方・考え方を意識させることができた。
- ・ 手だて2では、ICT機器で録音して自分たちの演奏を客観的に聴かせたり、「カトカトーン」を用いて音楽づくりを行ったりすることで、互いの演奏や曲のよさに気づき、高め合おうとすることができた。
- ・ 手だて3では、題材全体を見通すことができる振り返りシートを用いたり、付箋を使った投票など学習のまとめ方を工夫したりすることで、児童一人一人に自己の成長を実感させることにつながった。

(3) 課題

- ・ 音楽的な見方・考え方を意識させるために理解させたい「音楽を形づくっている要素」は数多くあり、児童がそれらを一度で正しく理解することは大変難しい。様々な題材を通して、繰り返し学んでいく中で、少しずつ身に付けていくことができるよう、これからも教師自身が題材を通してどんなことを学ばせたいか、音楽的な見方・考え方を働かせ、毎回の授業を展開していく必要がある。
- ・ 様々な学習活動を展開していく中で、児童がより仲間と共に高め合うことができるよう、学び合う場をいつ、どのように設定していけば効果的か、さらに検討していく必要がある。